

やすだ のぼる

安田 登

能楽師（下掛宝生流：ワキ方）

寺子屋 講師 （阿弥陀寺）

こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こまったときの 親鸞聖人



イラスト 中川 学

「地獄一定すみかぞかしの巻」

今回の親鸞聖

人のお言葉は「とても地獄は一定すみかぞかし」です。この意味についてお話しする前に、親鸞聖人について少しお話ししておきましょう。

詳しいことは大谷義文師にお聞きください。親鸞聖人は、

平安時代の終わり頃に、京都の日野の里というところで生まれになりました。そして、九歳という幼さで仏道修行のために比叡山にのぼられました。比叡山は、学問と厳しい修行で有名なお寺で、親鸞聖人（当時の名は範宴）は二十年間、それこそ死に物狂いで学問、修行に励まれました。

しかし、どんなにお経を読んでも、苦行をしても悟りに至ることでできない。親鸞聖人は、当時の比叡山の中でもっとも才能もあり、だからこそ期待の星でした。そんな親鸞聖人でも悟りに至ることはなかったのです。そこで親鸞聖人は比叡山を下りる決心をします。

比叡山を下りられた親鸞聖人は、京都の六角堂で百日間の参籠をされ、その九十五日目の夜、夢に現れた観音さまのお告げによって法然上人のもとを訪れます。

法然上人の教えを聞いた親鸞聖人は、びっくりしました。今までの仏教とはまったく違う教えだったからです。

それまでの仏教では、救われるのは戒律をちゃんと守り、厳しい修行を積んだ人だけだと言われていました。

しかし、生活のために仕事をしなければならぬ庶民は、厳しい修行なんてできるはずがありません。戒律だって、守る

のは難しい。ちなみに一般の人が守るべき戒律は次の五つです。

不殺生戒

（生き物を殺さない）

不偷盗戒

（盗みをしてはいけない）

不邪淫戒

（邪まな性行為をしない）

不妄語戒

（嘘をつかない）

不飲酒戒

（お酒を飲まない）

肉や魚を食べる私たちは、まずは最初の「不殺生戒」を破っているで

しょ。また「不妄語戒」、すなわちウソをつかない

なんてことは絶対ムリ。

「不飲酒戒（お酒を飲まない）」は夜ごと夜ごと

破っている人も多いと思

います。

当時の仏教では、このような戒律を守れない人は救われないし、地獄に墮ちるといわれていました。法然上人の教えはまったく違っていたのです。

法然上人は「ただ南無阿弥陀仏を唱えればよい」と教えられました。

います。

「かりに法然聖人にだまされて、念仏して地獄におちたとしても、わたしはすこしも後悔はしない」といいます。なぜなら、自分は悟って仏になれるような身ではないから、と。

親鸞聖人ほどの方が悟って仏さまになれないならば、ふつうの人には絶対ムリですよ。でも、考えてみたら「悟りたいから」修行をするというのは、もうそれだけで「自分のため」の修行なので純粋なものではありません。人は人である限り、純粋な修行なんてできません。

もし、自分が超すごい人間で、本当の修行ができ、仏さまになれるはずだったのに、法然上人のせいで地獄に墮ちたならば「ああ、法然上人にだまされた」という後悔も起きるだろう。しかし、自分はそのようなことはできるような人間ではない。自分にとっては地獄こそが住処なんだ。

そういうのです。

この「自分にとつては地獄こそが住処なんだ」は原文では次のようにいます。

「とても地獄は一定すみかぞかし」

声に出して読んでみてください。力強い響きを持つています。これが今日の親鸞聖人のお言葉です。



仏教では、人は六道と呼ばれる、さまざまな世界に生まれ変わり、死に変わる（輪廻）と考えます。以下の六つです。

【天】苦しみも少なく、寿命も長い世界。そこに住む人は天人と呼ばれ、空を飛ぶことができ、楽しみの中に生活をします。【人間】私たちの世界です。楽しみもありますが、四苦八苦という苦しみや悩みもある世界です。

【修羅】常に戦いに明け暮れる、怒りや苦しみが続かない世界。【畜生】畜生とは動物のことです。本能だけで生

きる、弱肉強食の世界。他人からこき使われ役され、その対価として養ってもらう（畜養）ような世界です。

【餓鬼】常に餓えと渇きに悩まされる世界。

【地獄】ありとあらゆる苦しみがある、苦しみの百貨店のような世界。

いま私たちは「人間」界に住んでいます。この生でどんな生活を送っていたかで、来世にこの六つの世界のどこかに行くかが決まります。

仏教の究極の理想は、この六道から自由になること（成仏）ですが、成仏はそう簡単にはできないので、成仏する前に極楽（浄土）という、天よりもすばらしい世界に行つて生き直し（往生）、仏さまになるための準備をします。

「法然上人の念仏によつて極楽（浄土）に行けるのならば、そんな嬉しいことはない。でも、ダメならばしかたない」と親鸞聖人は思います。

なぜなら「とても地獄は一定すみかぞかし」だからなのです。



私はお坊さんではないので勝手なことを言わせていた。だと、地獄などの六道は死後の世界だけでなく、この世にもあると思うのです。

生きていくと次から次へと無理難題が降りかかってくる。順風満帆の人生などない。人の一生は波乱万丈です。

むろん、時には天の楽しみを味わうこともあるでしょう。しかし、ある人は尽きることもない苦しみに日々さいなまれる「地獄」道を味わっています。また、いつも不満たらた、常に何かを欲しがっている人は「餓鬼」の苦しみを味わっています。

あるいは常に競争社会の中に投げ込まれ「修羅」の戦いを繰り返している人もいるし、ある人

はいやいや人からこき使われる「畜生」道の苦しみを味わっています。

大人だけではありません。学校はイヤだ、勉強もイヤだ、友だち関係だつて苦痛だ。そういう子も少なくありません。

他人を見ていると、みんな案外気楽そうに生活しています。しかし、みんな表面は何気ない生活を送りながら、この奥では、六道をあつちへ行ったり、こつちへ行ったりしています。

「なぜ、あの人はあんなに楽しそうに生きているんだろう」、そう思います。「隣の芝生は青く見える」といわれるように、人は人を羨むものです。

この人を羨む気持ちは、「本来は、あそこは俺がいるべき場所だ」というところから出ていることが多いようです。

楽しそうな人を見る。「本来、楽しんでいるのは俺であるはずだ。それなのに俺は苦しんで

いて、あいつが楽しんでいるのだ。何かで成功した人を見る。「本来、あの地位にいるのは俺であるはずだ。それなのに俺はあいつがいる」。

「私の方が優れているのに、なぜあの人が」、「私の方がきれいなのに、なぜあの人が」、そんな思いを私たちは持つています。そして、それが私たちを苦しめます。

私たちは無意識のうちに「自分は、苦の少ない【天】に住むべき人間だ」と思っています。ですから、苦しみがあると「なぜ、自分だけこんなに苦しむんだ」と思ってしまう。いま流行りのポジティブ・シンキングでは、なんでも「いいように、いいように」考えるのがいいといわれています。が、実はこれが苦しみを増大させる原因のひとつになっています。

親鸞聖人ですら自分の住まいは地獄だと言われています。私たちも親鸞聖人のような究極のネガ

ティブ・シンキング、「俺はどうせ地獄に住むべき人間よ」Ⅱ「とても地獄は一定すみかぞかし」と思つてみるのはどうでしょうか。

そうすると、ちよつとも楽しみがあると「おお、ラッキー」と思えます。ちよつとも成功をすると「ああ、阿弥陀様のおかげだ」と思えるようになります。

もちろん、これはそんなに簡単にできることではありません。でも、大変な状況になったら、親鸞聖人の「とても地獄は一定すみかぞかし」を口に出してみる。そして、「南無阿弥陀仏」と唱えてみる。それを何度か繰り返していると、「こんな大変な状況だけれども、地獄よりははずつといいか」と感じられるようになります。いまの生活に感謝できるようになります。

九月の秋彼岸会法要では、地獄と極楽についてお話をさせていただきま